

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

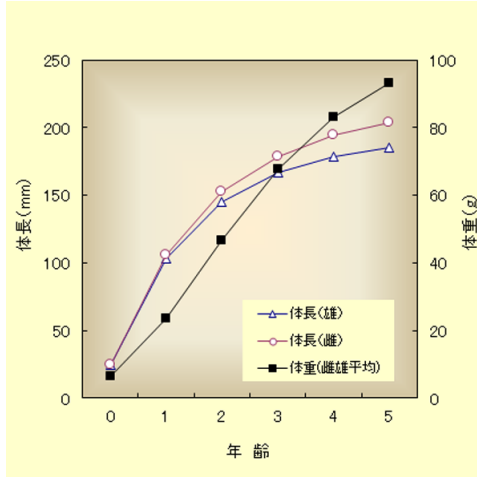
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 5歳（年齢および年級は、ふ化した年を生まれ年とし1月1日に加齢する表記）
成熟開始年齢： 雄：1歳（割合は不明）、雌：2歳（100%）
産卵期・産卵場： 12月上・中旬、主に秋田県沿岸の藻場
食性： 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者： 大型魚類（マダラ等）

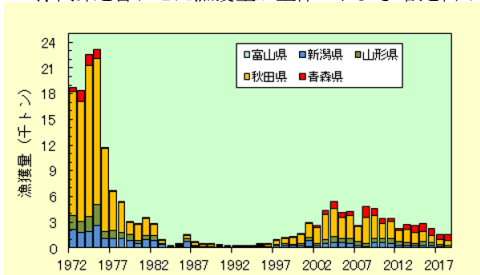


漁業の特徴

青森県～富山県では、夏と産卵期以外の周年、小型底びき網(小底)や沖合底びき網(沖底)により漁獲されている。小底と沖底をあわせた底びき網による漁獲量が全体の約5割を占める。また、ハタハタの産地として有名な秋田県、青森県の両県の浅海域では、産卵期にあたる12月上中旬に、定置網、底建て網、刺網で漁獲されている。定置網の漁獲量は全体の約5割を占める。

漁獲の動向

漁獲量は、2万トン程度であった1970年代前半から1980年代にかけて急激に減少して1991年は158トンとなった。この急激な悪化を受け、秋田県が3年間禁漁し、2004年には5,405トンにまで回復した。しかし、2010年頃から再び減少し、2018年では1,519トンであった。直近5年間(2014～2018年)の県別漁獲量では、青森県と秋田県が概ね等しく、両県を合わせた漁獲量が全体のおよそ8割を占めている。

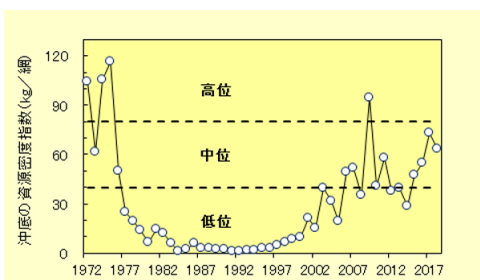


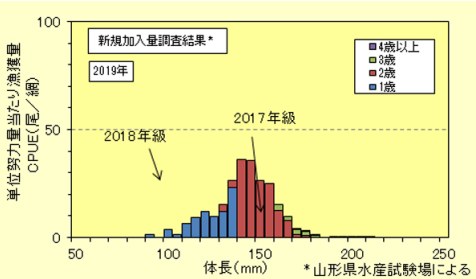
資源評価法

沖底の資源密度指数を資源量指標値とし、それに基づき資源状態を判断した。2016～2019年7～8月に実施した日本海北部底魚資源調査(秋田県から新潟県の沿岸水深200～500m)、また、山形県水産試験場が4～5月に実施した新規加入量調査ならびに漁獲物の体長組成調査に基づき、近年の年齢組成および各年級の豊度を推察した。

資源状態

沖底の資源密度指数は、2001年以降、周期的に増減を繰り返しながら増加している。新規加入量調査の結果から、2020年に漁獲される2018年級の豊度は比較的低いと推察された。資源水準の境は、漁獲が多かった1970年代半ばに記録された資源密度指数の最高値およそ120を3等分し、高位と中位の境を80、中位と低位の境を40とした。2018年の資源密度指数は63.3であり、資源水準は中位と判断された。資源動向については、直近5年間(2014～2018年)の資源密度指数の推移から増加と判断された。





管理方策

資源水準および資源量指標値(沖底の資源密度指数)に合わせて漁獲を行うことを管理方策とし、2020年のABCを算定した。なお、資源水準は中位、動向は増加であるが、2020年に漁獲の主体となる2018年級の豊度は低いと推察されたことから、過度に漁獲することのないよう配慮すべきである。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (百トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値 からの増減%)
0.9・Cave3-yr・1.07	Target	14	—	—
	Limit	17	—	—

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則2-1)に基づき、ABCは $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した。係数 α には標準値0.8を用いた
- 係数 δ_1 は、水準決定方法を考慮した中位水準の標準値の0.9、Ctは2016～2018年の平均漁獲量(Cave3-yr)である1,776トン
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、b(4.19)とl(63.7)は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2016～2018年))
- ABCは十トンの位を四捨五入した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は増加
- 2020年に漁獲主体となる2018年級の豊度は低いと推察される

管理方策のまとめ

- 資源水準および資源量指標値(沖底の資源密度指数)に合わせて漁獲を行うことを管理方策とし、2020年のABCを算定した
- 2020年に漁獲の主体となる2018年級の豊度は低いと推察されたため、過度に漁獲することのないよう配慮すべき

執筆者: 飯田真也・藤原邦浩・八木佑太・松倉隆一

資源評価は毎年更新されます。